

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

紙の辿った道：  
中国とヨーロッパの狭間のイスラム世界

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009281">http://hdl.handle.net/10502/00009281</a>

# 紙の辿った道

——中国とヨーロッパの狭間のイスラム世界

山中由里子

## 1 失われた環<sup>ミッシングリンク</sup>

紙という、知識の普及にとつて非常に重要な媒体は、中国において発明され、八世紀にイスラム世界に移入され、一二世紀までにはイベリア半島で生産されるようになり、そこからヨーロッパに伝わっていった。しかし、紙の歴史を辿るにあたって、その発祥の地である中国と、可動活字印刷技術を発明したヨーロッパの狭間に位置する西アジアの文明の役割は、あまり正当に評価されてこなかったといえよう。

ジョナサン・ブルームというアメリカのイスラム美術史家は、『印刷以前の紙——イスラム世界における紙の歴史とその影響』において、この「失われた環」における紙の生産、普及、使用の実態を明らかにしようとした(Bloom 2001)。ブルームによると、ヨーロッパにおいては紙の登場と可動活字印刷機の発明との間の期間が比較的短いため、紙と印刷技術の歴史は大概セットで論じられ、クランチャー、フェーヴル、マルタンなどによる記憶から記録への移行についての研究においては、紙自体の媒体としての役割にはあまり注意がはらわれてこなかったという。

さらに、イスラム世界における製紙産業の発達<sup>2</sup>が正当に評価されてこなかった理由として、彼は次の四つの点を挙げてい

(1) 一三世紀にイタリヤが製紙を始め、より安く、丈夫な製品が北アフリカや西アジアに輸出されるようになる、イスラム世界の製紙業は次第に廃れた。紙がイスラム世界の重要な産業であったことは、一九世紀までにはヨーロッパでは忘れられていた。

(2) イスラム世界の紙には透かし模様がなく、年代の確定が難しく、ヨーロッパの紙に比べると研究しにくい。

(3) イスラム世界における印刷の導入は遅い。したがって、紙と印刷技術の歴史が強く結びついているヨーロッパの研究においては、イスラム世界は無視されがちであった。

(4) イスラム文明の貢献自体を一般的に蔑んできたヨーロッパ研究者の傾向。

紙の登場はコンピュータの導入に相当するといっても過言ではないほど、知的生産の技術に与えた影響は大きかったはずで、八世紀半ばから一三世紀のモンゴル侵攻までの五世紀ほど、いわゆる「イスラムの黄金時代」における学問の発展は、このメディア革命が引き金になったともいえる。

本章では、まず紙の導入以前のイスラム世界における知識の伝達形態についてふれてから、紙の普及が思考、あるいは伝達の様式をどのように変化させたかについてブルームやグレゴル・シェーラーの説を紹介しながら考察する。<sup>(2)</sup>

## 2 イスラム初期における知の伝達形態

一般的に、イスラムの勃興前後のアラビア半島では、書承文化があまり発達していなかった、といわれている。だが、「文学」がまったく存在しなかったわけではない。イスラム以前のアラブ社会においては、部族の誇りを詠いこめたり、雄弁を競いあったりする公的な表現形式として、詩が非常に重要な位置を占めていた。著名な詩人の詩は、ラウイー (Lami) とよばれる伝承者によって、口頭で朗誦されて広く公開され、伝達されていった。一方で、契約書、条約、書簡などを羊皮紙、パピルスなどの媒体に記録し保存するという慣わしはイスラム以前から存在したが、遊牧

民社会においては情報を普及させるための手段としては口頭伝承のほうが適していた。

ムスリムが最初に編纂した「本」は『クルアーン』（コーラン）であるが、預言者ムハンマド自らが正典を監修したわけではない。六一〇年からムハンマドの死の六三二年までに預言者が神から下された啓示は、詩の伝承に近いが、カーリ（*qari'*）とよばれる朗誦者が記憶し、語りひろめたとされる。すべての啓示が集録され、正典が編まれたのは、ムハンマドの死後二〇年から二五年頃である。

では、書かれた物としての聖典の存在が否定されていたのかというと、そうではない。そもそも「クルアーン *qur'an*」とは、「読誦」、あるいは「読誦されるもの」の意である。シェーラーが指摘しているように、「クルアーン」には、「朗誦 recitation」と、「読誦集 lectionnaire」の両方の意味が含まれており、朗誦者が読みあげるための書かれたテキストの存在が初めにあることを示唆している（Schöler 2002: 32）。『クルアーン』自体には、「天に護持されている書板」（クルアーン八五：一二―二二）、「神の手元にある啓典の母体」（クルアーン四三：三一―四）を、神が天使ジブリール（ガブリエル）をとおしてムハンマドに読み聞かせたという経緯が記されている。つまり、イスラームの教えの根本のテキストは神の手元にあり、それが朗々と読みあげられたかたちで現世の人々に下されたというわけである。

では、現世での書物としての『クルアーン』は、実際にどのようなように成り立ったのか。まず、ムハンマド自身がおそらくメッカ第二期の頃から、啓示を書きとめさせたという伝承は多く、また朗誦者たちは記憶を補助するメモのようなものを使ったのではないかとされている（Schöler 2002: 31―33）。啓示の章句は羊皮紙、木の皮、石板、また骨などに断片的に記されたかたちで存在したが、組織的に保管されてはいなかった。

ムハンマドの死の翌年六三二年に、正統カリフ（イスラム共同体の最高指導者）、アブー・バクルの軍と、自らを預言者と宣言し蜂起したムサイリマ派との間で起こったヤマーマの戦いにおいて、『クルアーン』を暗記していた者の多くが戦死した。そこで、カリフは啓典の断片の収集と記録を、「啓示の筆記人 *kاتب al-wahy*」の一人であるザイド・イブン・サービト（Zayd ibn Thabit）に命じた。ザイドは章句を集め、他の教友たちの記憶と照らし合わせて校



図1 タシュケント（ウズベキスタン）のテリヤ・シェイフ・モスクに保存されている『クルアーン』写本。7世紀の「ウスマーンのクルアーン」といわれるが、字体がクーフィー体のため、実際には九世紀頃のものだと推定される。（GNU Free documentation license）

訂し、同じ大きさの羊皮紙の「スフフ *shuf*」（頁）に全章句を書きとめた。ここで『クルアーン』は一冊の「ムスハフ *mus-haf*」（冊子、コードックス）にまとめられ、第二代カリフ、ウマルの娘で、ムハンマドの未亡人のハフサの許に保管された。

しかしこのような啓示の章句のコーパスは、その後もカリフの一族以外によっても作られ、正典が設定されなまま語り継がれていった啓示の文言には、不統一が生じはじめた。<sup>5)</sup> 啓典の読み方をめぐって起こった論争は、共同体の統一と神の言葉の絶対性を危機にさらす政治的、教義的問題へと発展しつつあった。

この問題を重くみた第三代正統カリフ、ウスマーン（在位六四四―六五六）は、再度ザイド・イブン・サービトを起用した。ザイドは各地から様々な媒体に記された啓示の章句を集め、ハフサのもとに保管されていたコードックスと照合し、公定の聖典を作りあげた。カリフはその写しを地方の主要都市に送り、公定版と一致しない異文は破棄するよう命じた。こうしてムスリムにとって最初の、そして本源的な「本」が誕生するわけである。そして聖典のテクストの統一と普及が、共同体意識を強化し、政治的な安定をもたらした（図1）。

それから一世紀ほどの間ムスリムは、共同体の誕生と拡大に関連した事柄、特に預言者ムハンマドの生涯についての知識を蓄積することに専心した。それは歴史の保存のためだけではなく、『クルアーン』の解釈や、信者たちの日々の営みを定める法規の規範などとも関連した学問体系へと発展した。この知識の情報源は多くの場合、ムハンマドの言動を直接見聞きした教友たちの証言であったが、これらの伝承をハディース (*hadith*) という。

初期のハディース学においては、書物が学問的情報伝達手段としては蔑まれる、あるいは信頼されない傾向にあり、

文字に記されたものよりも口頭伝承に価値がおかれた。そして情報の信憑性を保証するための一定の伝承形式が確立された。すなわち、伝承内容の本文マトン (*matn*) は、どのような伝承経路を伝わってきたかを示す、一連の伝承保証者の鎖 (a は言った・私が b から、b が c から…g が h から伝えられたことによると…) であるイスナード (*isnad*) と必ずセットで伝えられなければならない。イスナードとマトンから成る一つのハディースは、特定の出来事、あるいは事柄に関する比較的短い叙述の単位である。

伝承を記録することに対する懐疑心の根源にあるのは、啓典『クルアーン』のみが書き記された唯一の「本」であるべきだ、というイデオロギー的な理由であろう。しかし、当時のアラビア文字は分音符号を省略したかたちで書かれることが多く、符号を欠くと同じような形になってしまいう文字だけに頼っていたのでは読み方の意味を間違える可能性が高かったという実際的な問題も、口頭伝承重視の背景にあったことはまちがいない (Schaefer 2002: 46; Schaefer 2006: 41-2; Cook 1997: 437-530)。

これらの語られた知識が集積され、内容ごとに分類され、書きとめられ、「ムサンナファート *musannafāt*」(集成)として普及しはじめるのはアッバース朝(七五〇―一二五八年)の治世が始まる八世紀半ば頃とされる。しかしそれらの多くは九世紀以降に編纂された「古典」に吸収され、断片的にしかな存在しない。つまり、後世にまとめられた書に断片的に引用された幾重もの情報の層を見分けなければ、これらの初期の書物の原型は再現できないわけである。

後世の引用しか現存しないという点が常に不確定要素として残るため、書物としてのハディース集成が登場しはじめる時期については現代の学者たちのあいだで論争がくり広げられてきた。この議論は総じて「口承論」対「書承論」という二項対立的になりがちであった。前者の主唱者は、ハディース学研究の基礎を築いたゴルトツィアーアで、彼は八世紀すでに章節に分けられた構成をもったハディース集成が存在したことを否定し、九世紀のブハーリー(八七〇年没)やムスリム(八七五年没)などによる古典的ハディース集成は口頭伝承にもとづいて編まれたと論じた (Goldziner 1890: 1-274)。

一方、セズギンやアポットは、ムスリムはすでに八世紀半ばより以前に、イスラム勃興時からウマイヤ朝期にかけ

て書物を記してきたとしている。その多くが散逸してしまっていることをセズギンは認めるが、九、一〇世紀に編纂された書に散在する伝承のイスナードを辿ることによって、断片を再構築し、初期の書物が再現できると主張した (Sezgin 1967-84: esp. vol. I)。またアボットは、アッバース朝以前の学問の口承性のみが強調されることを批判し、すでにウマイヤ朝時代から宗教的・世俗的内容の書物が記されていたことをバピルス文書の研究によって示している (Abbott 1957: 5-31)。

初期のムスリムの学者たちは知識の伝達を口頭で行い、書かれたテキストに依拠しなかったとする説と、早い時期から書物が存在したとする説の対立の間で、「書き記すこと」は必ずしも「書物として公開すること、公刊すること」と同じではないという立場に立つのがシュプレンガーやシェーラーである。シュプレンガーはすでに一九世紀半ばに、備忘録や講義用のノートと、公開される目的で記された書物は区別すべきであると述べていた (Spengler 1869: XCIII, 1866: 5-6)。「口承対書承」論争の中で彼の説は忘れられていたが、シェーラーはその妥当性を再評価し、むしろ「シユングラム『syngramma』(定められた形式に従い構成され編集された書)」と「ヒュポムネー『hypomnema』(心算えのためのメモ、書き付け)」というギリシア古典文献学の概念をアラブ文学にあてはめて説明している。彼によると、口頭での知識の公開を重視するハディースは書かれた資料をまったく排除するものではなく、師は伝承を伝える際に講義ノートのようなものを個人的に使い、また生徒は記憶を補助するためにやはりメモをとったのだろうという。そして、写本が普及しはじめても、知識の公開、伝授は基本的に口頭で行われるものでありつづけた。このような知の伝達手段はシェーラーによると、アラブの詩の伝統、アレクサンドリアを中心に発展したヘレニズムの学問、ユダヤの口伝律法タルムードなどの影響を受けているという。

### 3 紙の導入

さて、本としての体裁を整えた書物が登場しはじめたとされる八世紀半ばといえは、ちょうど紙の生産技術が中国



図2 年代の明記された最古のアラブ紙資料であると同時に、最古の「千一夜物語」断片。(シカゴ大学東洋研究所博物館蔵 OIM 17618 recto)

からアッバース朝バグダードにもたらされた頃である。七五一年、中央アジアの覇権をめぐる唐とアッバース朝がタラス河畔（現在のカザフスタン領）で戦い、アッバース朝が勝利した際に捕虜となった中国人のなかに製紙職人がいたらしく、麻のぼろ布を主原料とした紙漉ぎの技術が伝わった。その後、紙は中央アジアからじわじわと西に伝わっていったのではなく、イラクのバグダードに首都をおくアッバース朝の権力の成立とともに爆発的に広がった。バグダード最初の製紙工場は七九四年に建てられ、その後エジプト、シリア、マグレブにも工場が出来、一〇世紀までにはパピルス、羊皮紙など従来の媒体にとってかわったという(図2)。以下、基本的に冒頭に挙げたブルームの概説に沿って、イスラム世界における紙の導入と思考の変革について紹介する。

紙は、羊皮紙のように高価でなく、パピルスのようにほころびやすくもない。しかもインクが紙の繊維に浸透すると、容易に消したり、削りとったりすることができず、偽造が難しい。アッバース朝は中央アジアの占領によって手に入れた紙を、領土の広がりとともに激増してゆく行政の記録を保管するメディアとしてさつそく採用し、広めた。伝書鳩にメッセージを運ばせるための特別な紙が存在したという記録などもあり、行政、および情報伝達の媒体であったという意味において、紙が広大なアッバース帝国の運営を支えていたということがよくわかる。

紙の導入は行政システムの確立だけでなく、信仰、学問、娯楽などの様々な分野の著述活動を促し、また建築、工芸などの物質文明にも変革をもたらした(Bloom 2001: ch. 3, ch. 4, ch. 5)。安価な書写媒体である紙の普及が、書物の急増の起爆剤になったことはまちがいないが、活字印刷がまだないなかでそれを支





図3 作品を読み上げる著者と筆記する弟子たち。1287年にバグダードで作成された『純正同朋団の百科全書』(Rasā'il ikhwān al-safā) 写本。(イスタンブール、シュレイマニエ図書館蔵, Esad Efendi 3638 fol. 3b)

つもの写本が生産され、それが需要の高い作品であれば無限連鎖講的に部数が増え、人間の移動とともに知識が広まるといふ効率のよいシステムであったというわけである。

イスラム世界が活字印刷をなかなか取り入れなかったことは、しばしばイスラム文明の衰退の原因の一つとさえさされるが、ブルームはこの「出版」のシステムは、じつは一〇世紀に発達した中国の印刷技術に匹敵するほどの有効性があったのではないかと推測している。ただ、彼が指摘していないのは、このシステムにおいても原典が無限に忠実に再現され保存されていったわけではなく、各時代の思潮に合わせて古い作品が断片的にのみ引用されたり、再編纂されたり、あるいは写されなくなり完全に散逸してしまったりと、知識の在り方は流動的であったということである。また、紙が知識の生産と広がり即ち媒体であったということはよくわかるのであるが、そもそもなぜアップバース朝時代にこれほど文芸が開花し、書物が増えたのかという理由に関しては、ブルームには十分な説明がみられない。「パトロンが本を求めるために市場が発達したから」、「知識に対する一般的な好奇心が高まったから」といったよう

えたのは、イスラム世界独自の「出版」システムであった。アラブの写本は、一人の筆耕がカリカリと写本を写しとってゆくという孤独で無言の世界の中で作られていたのではなく、その生産過程は、シェーラーが主張するように口承と書承を組み合わせたものであった。特定の著作物を教授する正統な権威をもつ学者が、モスクなどの学びの場で作品を読みあげ、それを何人も弟子らが写しとり、その弟子らがまた教授の資格を得て、さらに写しを増やしていくというものであった(図3)。一度の朗読でいく

な説明が見受けられるが、もう少し考察がされてもよかったかもしれない。アッバース朝時代の学問の発展は確かに膨大な主題なので深くは立ち入れないが、紙の普及との関連において多少説明を補っておこう。

前述したようにイスラム勃興から一世紀ほどは、ムスリムの文芸活動がおもにイスラム共同体内部の記憶の保存、および一神教的過去のイスラム的解釈に費やされていたのが、アッバース朝の成立によって非アラブの地位が向上され、知的視野はさらに広がる。イラン系の知識人やネストリウス派キリスト教徒が宮廷の書記官や翻訳官として起用され、ササン朝ペルシア、ヘレニズムの学問的遺産をバフラヴィー語（中世ベルシア語）やギリシア語、シリア語からアラビア語に翻訳し、取り入れてゆくからである。特に学問のパトロンとして名高いカリフ、マアムーン（在位八一三―八三三年）は八三〇年頃、バグダードに「知恵の館 *bayt al-hikma*」を設立し、哲学、科学、数学、医学などの写本の収集と翻訳事業を大規模に行った。

このような、イスラムに先行する諸文明の学問的伝統の移入の動きのなかで、知識の伝達はイスナードをともなつたハディースの形態に厳密にとられないようになる。その過程において口承の要素は重要でありつづけるが、書籍に対する不信任は、それ以前の時代にくらべると明らかに薄らいでゆく。<sup>①</sup>

さらに、権力と富と知の集中によって宮廷文化が洗練されてゆくとともに、支配者層、書記階級に求められる「*アダブ adab*」（教養）の幅がより広くなり、また、広大な帝国を支配するための実用的な知識も増した。そこで、歴史、修辞学、礼儀作法、道徳から馬術にいたるまでの様々な分野の教科書的なテキストの需要も増えたわけである。

こうして紙の導入は、情報の種類と量の増大、そして知識の需要拡大と相まって、知的産物としての書物の普及につながった。

#### 4 思考の変革

ブルームは先述の書の第四章において、数学、商業、地図学、音楽、系統学、軍事などの人文学的な分野以外での

紙を使った表記法を紹介し、いかに紙が数学的な思考、取引、移動、演奏、アイデンティティの確認、戦闘の道具として使われていたかを考察して興味深い。さらに第五章では、美術史家である著者がもつとも得意とする視覚芸術と紙の関係について論じている。ブルームは細密画や書道などの歴史に話をとどめるのではなく、紙の普及が他の視覚芸術に与えたインパクトについて述べている。視覚芸術の製作において紙の存在意義が高まるのは一三世紀以降であるとし、その頃から紙の使用が職工たちに普及するようになる、焼き物、織物、金属製品に施す装飾が、事前に紙面の上でデザインされるようになる。あるいは複雑な建築物のプランなども紙の上で設計できるようになる。親方から弟子へ経験的に伝えられていた、土地に根づいた技術や意匠が、もともとのコンテキストから独立し、別の土地に移入されたり、別の媒材で使われたり（例えば、建築物の装飾模様が書物の扉に使われるなど）するようになったというのである。紙という新たな思考の道具が様々な分野において技術革新をもたらしたということが非常によくわかる。

紙を思考の道具としてとらえるブルームのこのような観点を、学問の伝達形式の歴史に関するシェーラーの研究に重ね合わせると、紙が人文学的な著述活動に与えた影響がさらに明確にみえてくる。

前述したようにイスラム暦の最初の一世紀の間に蓄積された伝承が、「タスニーフ *tasniif*」（組織的な分類）の概念によって整理されたムサンナフアート（集成）となつて現われるのは、ちょうど紙がイスラム世界に登場し、普及しはじめた八世紀半ばと重なっている。タスニーフの概念は歴史学の分野にも及び、単独の出来事に関する伝承が時間軸に沿ったより長い叙述につながってくるのもこの頃である。ムハンマドとイスラム教の登場をこの世の始まり以来の預言者たちの歴史の中に位置づけた最初の著作物は、イブン・イスハーク (*Muhammad Ibn Isḥāq* 七〇四年頃—七六七年) の『*行伝 Sira*』である。

シェーラーはこの分類・整理・集成の思考が伝承学者たち自身のあいだから発生したのか、宮廷の書記官たちの文書処理の方式からの影響なのか疑問が残るとしている (*Schaefer* 2002: 64-65, 72)。いずれにせよ、ムサンナフアートと紙の登場の時期が同じであることは単なる偶然ではないであろう。安価で運びやすい書写媒体の普及によって蓄

積・処理できる情報の量は増え、その道具を使って記憶のなかでは視覚化されていなかった情報を目の前に並べ、整理することが可能になったはずである。紙の導入がタスニーフの概念の発生を促した重要な要素の一つだったということも十分に考えられるのではないであろうか。

## 5 新たな媒体革命——ペーパーレスの時代

この三〇年ほどの間に新たな思考の道具が急激に一般に普及しつつある。我々は、コンピューターの導入による記録・情報伝達の革命の最中にいるのである。日常の情報伝達は「ペーパーレス化」され、インターネットと検索エンジンのおかげで膨大な情報にアクセスすることが可能になった。筆者自身も一五年ほど前までは、思いつきや文献から得た知識を情報カードに書きとめ、それを床の上に並べ整理し、原稿用紙に向かって文章を練り、重い辞書・事典をいちいち紐解きながら言葉を選んでいった。図書館でしか参照できなかった二〇巻の『オックスフォード英語辞典』は今や二枚のCD-ROMに収まり、約五〇万語以上の言葉を自宅のコンピューターでも瞬時にして検索することができる。参考文献も、図書館でコピーせずとも電子ジャーナル・アーカイブズからダウンロードし、保存しておくことができる。集めた知識は文書ファイルやデータベースに蓄積し、文章を画面上で切り貼りしながら、構成を整えてゆく。これに慣れてくると、ペンと紙を使っての執筆が億劫にすらなってくる。

新たなメディアに対する警戒から解かれ、信頼、依存関係へと発展する過程、さらにそれにもなった思考様式の改革は、まさに中世ムスリム知識人たちが紙の導入の衝撃として体験したことに通じるといえよう。人間が新しい思考の道具を発見したとき、どのようにしてそれに順応し、使いこなしてゆくのかということを解明するためにも、イラム世界における紙の影響力について今後さらに深い研究が求められる。

- (1) 「イスラム世界」という用語の妥当性を問題視する見解もあるが(羽田 二〇〇五)、本論では羽田氏が「歴史的イスラーム世界」とよぶ、「支配者がムスリムでイスラーム法による統治が行われている地域」という意味に限定して使う。
- (2) イスラム初期の学問の伝達に関してシェーラーは一九八〇年代以降、いくつかの論考をドイツ語で発表しており、「イスラーム初期における口承と書承」(Scheler 2006) はそれらを英訳した論文集。「書くこと、伝えること——イスラーム初期において」(Scheler 2002) はフランス語による講義をもとに書いた総論。
- (3) シェーラーに加え、参考になるのは、テロシエ(Deroche 2004)。
- (4) 通常「本」を指すキターブ(*kitab*)は、「啓典」の意味にも使われる。例えばユダヤ・キリスト・イスラーム教徒を指す「啓典の民」はアフル・フル・キターブ(*ahl al-kitab*)という。一方、スフフ(*sūf*)は必ずしも綴じられていない書かれた頁で、ムスハフ(*muṣḥaf*)は「冊子」、「綴本」、「コデックス」に近い意味。これらの概念の違いなどについて詳細は、マディガン(Madigan 2001)。
- (5) シェーラーは『クルアーン』と詩の伝承の手法の類似を指摘し、啓典に異文が発生したという現象は伝承者の記憶の不確かさのみに拠るのではなく、ラウイーによる詩の伝承においては原文が改訂されてゆくことが認められ、むしろ表現の改善が奨励されていたので、啓典の伝承において似たようなことが起こりはじめたのではないかと述べている(Scheler 2002: 33-34)。
- (6) ジョナサン・ブルームの『印刷以前の紙』(Bloom 2001)は、イスラーム世界への紙の導入とその普及の歴史に関して最もよくまとまっている。ブルームも指摘しているように、イスラーム世界の紙に関する優れた先行研究(Joset von Karabacek, Jean Irigoin, Don Baker, Helen Loveday など)があるが、これらは透かしのないアラブ紙の写本をいかに分類するかという専門的な研究であり、ブルームのようにより大きなコンテクストの中でイスラーム世界の紙を考察したものではない。ただし、北アフリカからインドあたりまでの広い地域を、時代、地域ごとの政治・経済・文化状況を知らない一般読者に向かって「イスラーム世界」という一枚岩的な用語でくくっていることは、本書の問題の一つかもしれない。例えば、「二六世紀までにはイスラーム世界のほとんどの地において製紙業は廃れてしまった。ただしトルコ、イラン、インドを除いては」(p. 5)といったような、当時の三大帝国オスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝をまるで「イスラーム世界」の辺境のようにあつかう発言は、歴史的実態を大胆に無視したもので誤解を招く。煩雑さを避け、また「中国文明」、「ヨーロッパ文明」と相対化させるための手段では

あるのだろうか、西アジアの歴史に馴染みの薄い読者が読むにあたっては注意が必要である。本章注1参照。

(7) 書籍に対する不信感については、地域的な温度差があったようである。例えば、イラクの学問的中心地の一つであったクワフでは、九世紀初め頃までは暗誦することへのこだわりがあったようであるが、一方メディナではハディースを書写し記録するところへの抵抗は、八世紀半ばまでには消えていたようである (Schöler 2002: 74-75)。

(8) タスニーフとムサンナフの二語は、「分類する」という意味の同じ語根 (sm) から派生している。シェラーは特に第五章において、このムサンナフの起源について考察している (Schöler 2002: 71-89)。

(9) 時間軸に沿った歴史叙述の始まりに関しては拙論においてももう少し詳しく考察した (山中 二〇〇六)。

#### 参考文献

羽田 正 二〇〇五 『イスラーム世界の創造』東京大学出版会。

山中由里子 二〇〇六 「初期イスラーム時代の歴史認識におけるアレクサンダロス」『比較文学研究』八七号、一七―四〇頁。

Abbott, Nabia. 1957. *Studies in Arabic Literary Papyri I: Historical Texts*. Chicago: Chicago University Press.

Bloom, Jonathan M. 2001. *Paper Before Print: The History and Impact of Paper in the Islamic World*. New Haven: Yale University Press.

Cook, Michael. 1997. "The Opponents of the Writing of Tradition in Early Islam." *Arabica* 44: 437-530.

Déroche, François. 2004. *Le livre manuscrit arabe: prélude à une histoire*. Paris: Bibliothèque nationale de France.

Goldzher, Ignaz. 1890. "Ueber die Entwicklung des Hadith." In *Muhammedanische Studien*, vol. 2, pp. 1-274. Halle: Niemeyer.

Madigan, Daniel A. 2001. *The Qur'an's Self Image: Writing and Authority in Islam's Scripture*. Princeton: Princeton University Press.

Schöler, Gregor. 2002. *Ecrire et transmettre dans les débuts de l'islam*. Paris: Presse Universitaire de France.

\_\_\_\_\_. 2006. *The Oral and the Written in Early Islam*, trans. Uwe Vagelpohl. London & New York: Routledge.

Sezgin, Fuat. 1967–84. *Geschichte des arabischen Schrifttums*, vols. 1–9. Leiden: Brill.

Sprenger, Alois. 1856. "Ueber das Traditionswesen bei Arabern." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 10: 5–6.

\_\_\_\_\_. 1869. *Das Leben und die Lehre des Mohammed*, vol. 3. 2nd ed. Berlin: Nicolai.